新聞の活用で学力低下に歯止めを

長野県ＮＩＥ推進協議会会長
信州大学教育学部教授　澁　澤　文　隆

◆　五十音が身に付かない児童の背景を探ると…

最近の子どもは、以前のような指導では基礎学力が身に付かない。基礎学力を身に付けさせるのに、以前に比べて手間暇がかかる。こんな声が学校の先生方から聞かれる。

ある小学校で、一年生を担任した先生が、夏休み前までにクラスの全児童に平仮名の五十音を身に付けさせることを目指し、創意工夫して学習指導を展開した。しかし、どうしても身に付けさせることができなかった児童が３名出てしまった。そこで、原因を探った。すると、３名に共通点が浮かび上がってきた。何と、いずれもが物心のついた時期からゲームの虜（とりこ）となり、今も暇さえあればテレビゲーム等に耽（ふけ）っていたのである。

子どもは、家族や仲間との会話の中で自然に言葉を身に付け、使うようになる。しかし、ゲームに耽けると、家族、仲間などとの会話の機会がめっきり減る。そのため、言葉の数が少なく、言葉への関心も低い。そうした状態で小学校に入学する。みんなは、「おはよう」の「お」、「りんご」の「り」とはこんな字だったのかなどと関心を持ち、既得の言葉と関連づけて平仮名を身に付けていく。ところが３名の児童は、既得の言葉が少ないので平仮名に直接出会い、いきなり文字として覚えるかたちになる。その上に、勉強がゲームのようにおもしろくないことから、嫌々ながら授業を受け、復習を怠っていたのである。

◆　余暇の貧困さが学力低下の一因では？

実は、最近の子どもは、勉強はノルマ、義務の時間であり、それを果たした上での余暇の時間は、保護者の干渉も拒絶できる自由な時間というように、勉強と余暇の時間を明確に分けて生活する傾向がみられる。そのため、余暇の時間は徹底的に遊びの時間として、ゲーム等に費やす。それは、楽しいだけで、成長には結び付かない過ごし方をしていることを意味している。

高度成長期以前は、子どもは家の手伝いをよくやったし、隣近所の子ども達ともよく遊んだ。テレビはなかったのでラジオを聞いたり、祖父母から昔話を聞いたりした。そうした中で自然体験、社会体験、勤労体験を繰り返し、言葉や手先の器用さなどを身に付け、感性や思考力などを磨いた。そうした豊かな体験が人間力をはぐくみ、基礎学力の素地をつくったのである。

それに対して現代っ子は、学校や塾の勉強さえすればノルマを果たしたとし、余暇の大部分を、本人の能力の開発、成長に結び付かないゲームなどの遊びに費やす。その結果、基礎学力の素地が生活の中でほとんどはぐくまれていない。

◆　新聞を活用して余暇の充実と学力の向上を！

偏りがひどく、多様性の乏しい現代っ子の余暇の過ごし方にメスを入れ、豊かな余暇活動を促すことが急務となっている。それが、基礎学力の素地をはぐくみ、学力向上に結び付く。そうした働きかけの一環として新聞を位置付け、新聞の活用を促したらどうか。

なぜならば、新聞は、動画、音声言語のテレビと違って、静止画、文字言語の世界であり、多様な情報の宝庫だからである。単に文字に親しむだけでなく、新聞を中心に家族で語り合ったり、記事をもとに想像したり、新聞の情報をもとに近隣の町や村を訪ねたり、イベントなどに参加したりすることもできる。記事ばかりでなく広告などに着目しても、表現活動などのいろんな学習の場となる。傾向性や数字に着目すると、確率や量的把握の世界を開く。それは豊かな体験を促し、基礎学力の素地をはぐくむことに結び付く。